

ケニアにおいて学校教育の機会を得ることの意味 —〈教育ライフストーリー〉の分析から—

澤村 信 英
(大阪大学大学院人間科学研究科)

1. はじめに

サブサハラ・アフリカ（以下、アフリカ）諸国における教育研究の成果は、ケニア1ヶ国に限っても膨大な量が存在する。しかし、そのような中でも、インタビューやエスノグラフィ的手法により人びとを調査の中心に据えた研究はまれである（澤村 2009）。インタビューをするにしても、構造化された質問紙に基づき機械的に聞き取るような方法が多く、自然な会話から問題を探り、課題を解き明かそうとする研究手法が採用されることはまずない。

筆者らが2000年から継続的に行ってきたケニアの小学校での調査にしても、当初の関心は留年と中途退学という目に見えるものが対象であった（澤村ほか 2003）。インタビューや観察が調査の中心になったのは最近のことである（例えば、澤村・伊元 2009；伊藤・澤村 2011）。これは教育研究の展開としては、自然なことでもあろう。

しかし、アフリカにおける教育研究に限れば、援助機関が調査研究を先導してきたこととも無関係ではない。セクター分析や大規模に行われるサーベイデータは、多くの研究者が裨益しており、重要な調査である。しかし、個々の研究者の関心に基づいた長期にわたってフィールドおよびそこに住む人びとと関わりながら調査を進めることは多くない。

質問紙や半構造化インタビューは、対象について一定の状況の把握がすでに行われ

ている場合は有効な研究手法であるが、そうでない場合、非構造化インタビュー（自然な会話）から調査をはじめ、現状や問題点を把握し、徐々に焦点を絞っていくのが通常である。ところが、多くのアフリカ教育研究は、時間的制約もあり、調査者側にすでに対象についての一定の知見が蓄積されているという前提で行われている。しかし、果たしてそうなのだろうか。

予断にもとづいて、人びとの生活実態とは別に、研究者の思い込みと関心で研究の枠組みを作り、その枠に入らないデータには関心を寄せない、というようなことは起こっていないだろうか。もう少し謙虚に、人びとの声に耳を傾け、人びとの生活に寄り添い、人びとの教育をめぐる人生経験の語り、すなわち本稿で言う「教育ライフストーリー」を聞き取り、そこから研究課題を紡ぎだすようなスローかつ一見非効率に見える研究手法にこそ、真実を解き明かすカギがあるように思えてならない（澤村 2007）。もちろん、そこにはインタビューデータの客観性や信頼性、実証性など多くの批判があるのも事実である。

本研究の目的は、人びとの生活経験において、学校教育、すなわち就学することがどのような位置づけにあり、いかなる役割を果たしてきたのかを明らかにすることである。就学機会を得たことにより、新たな人生の展望が開ける場合もあるであろうし、希望に反して就学が継続できなかった場合、逆効果もあるかもしれない。教育をめぐる生活の経験を聞き取ることは、過去にさか

のぼって教育の状況を把握することが可能となり、現在との比較も可能になる。特に、国際的に初等教育を普遍化しようとする現在の思潮において、生徒の学習到達度が極めて低い大多数のアフリカの学校で（すなわち新たな知識の習得という点で限界がある現実において）、果たして学校は万人にとって行く価値のある場所なのか、という問いに対する答えも秘められているような気がする。

2. 調査の方法

必ずしも豊かな生活ではない中で苦勞しながら就学した経験を有する7名を対象として、「教育ライフストーリー」の聞き取りを行った。「ライフストーリー」と「ライフヒストリー」は混乱しがちであるが、桜井(2002)によれば「ライフヒストリーは、調査の対象である語り手に照準し、語り手の語りを調査者がさまざまな補助データを補ったり、時系列的に順序を入れ替えるなど編集をへて再構成される。それに対して、ライフストーリーは口述の語りそのものの記述を意味するだけでなく、調査者を調査の重要な対象であると位置づけているところが特徴なのである」(9頁)としている。対象の見方としては、ライフストーリーは「個人が主観的な立場から自身の経験や生涯を再構成した」(山田1997、142頁)もので

ある。

ケニアをはじめとするアフリカ諸国では、自伝や日記といった文字化された資料がほとんどなく、人びとの語りに依存することが多い。したがって、現実とは異なる理想像を話したり、脚色がないとは言えない。そのような状況において語りの信頼度を高めるのは、調査者のもつ被調査者と共有できる知識や経験、聞き取りの技量であり、調査者により自ずと語りの質と信頼性は違うものとなる。本研究で明らかにしたいことは、教育をめぐる法則性や平均像ではなく、個々の人びとの主観的な考え方や生き方を通して、社会のあり方や変容を見ることであり、「教育ライフストーリー」のアプローチが調査手法として適当だと考えている。

調査対象者は、これまでのフィールド調査の主要な協力者、友人であり、その点においては、ラポールがすでに形成されているので、語りの信頼度は比較的高いと思われる。特定の指標にもとづいて何かの母集団から対象者を絞り込んだわけではなく、学校教育を受けたことが人生の転換点として、重要な意味を持つと推測される者を調査者が選んだ。

7人に対するインタビュー実施時期は異なる。インタビュー対象者の属性、学歴、現職などは表1のとおりである。次節において、各インタビュー結果の後に考察を加

表1 インタビュー対象者の属性、学歴、現職など

番号	仮名	性別	生年	最終学歴	現職	居住地	面談時期
(1)	ダムワ	男	1989年	中等学校	求職中	ナクル(農村)	2010年
(2)	ジョイク	女	1984年	小学校	家事	ナロック(農村)	2010年
(3)	ウィペレ	男	1974年	大学	公社社長	ナロック(都市)	2010年
(4)	ナムソン	男	1944年	大学院	大学教授	ナイロビ市	2010年
(5)	メシュコ	男	1969年	教員養成校	小学校教師	ナロック(農村)	2006年
(6)	ナイラバ	男	1958年	教員養成校	小学校校長	ナロック(農村)	2004年
(7)	オグツウ	男	1951年	大学	小学校校長	ナイロビ市	2006年

えた。なお、年齢はインタビュー当時のものであり、1米ドルは約80シリング(2010年)に相当する。

3. 結果と考察

(1) ダムワ (1989年生れ、22歳、男) :
2010年9月面談

5人兄弟姉妹の第1子として生まれた。第2子(1991年生れ、女)と第3子(1993年生れ、女)は小学校卒業後、それぞれ2008年(17歳)と2010年(17歳)に結婚している。第4子(1996年生れ、女)と第5子(1997年生れ、男)は、小学校7年と5年である。両親は彼が小学校4年(1999年)の時に離婚し、第3子から第5子までの兄弟は母親が養育している。父親は小規模の農業を営んでいたが、アルコール依存症が離婚の大きな理由である。両親が離婚してからは、祖母(後述)が実質的な後見人であった。彼の祖父(1924年生まれ)は現在も健在で、4人の妻をめとっている(祖母は、第3夫人)。

彼はエレメンテータ湖(塩湖)の近くに住み、第2子の妹(子どもが1人いる)と一緒に住み、3/4エーカーの土地がある。収入は、ソーダ灰を湖から道路まで運び1袋あたり30~50シリングで売ること、およびフラミンゴの羽飾りを観光客に販売することで得ているほか、週3回、建設現場で働き、1日150シリング、月に2000シリング程度の賃金を得るといふ。このような仕事には中等学校卒業の学歴は関係ないと認識しており、定職を探している。求職のための履歴書などをタイプ打ちしてくれる商店が町にある。

中等学校へは、2006年に入学し、2009年に卒業している。彼の中等学校の学費(授業料は年間11,000シリング)は、祖母(70歳代半ば)からの支援(農作物やヤギを売る)に加え、県から奨学金(不定期に年3000~

5000シリング)および休暇中に住み込みで働き約1000シリング(年3000シリング程度)を得ている。これで衣食住が足りるのかと思われるが、中古のジーンズ(250シリング)、靴(300シリング)など、先進国からの寄付と思われる生活物資が安価で売られている。祖母は彼が進学したいという意思を尊重し、金銭的な支援をしてくれた(後日、祖母に聞き取りをしたところでは、支援した理由は、長男であるからという理由で、女子であれば嫁入りするのでそうはしなかったということであった)。

中等学校卒業だけでは適当な就職がなく、カレッジへの進学を希望しているが授業料を払えない。卒業時(2009年)に受験する中等教育修了試験(Kenya Certificate of Secondary Education: KCSE)の総合成績はD+(A~Eの評価でAが最上位)であり、決して良くないが、この得点と授業料を払える経済力があれば、入学できるカレッジなどの高等教育機関は少なくない。4年の卒業時の級友43人(男23人、女20人)のクラス1番のKCSE成績がC+であり、C-が2人、D+が彼を含めて8人とのことであった(C, C-, D+が「平均(average)」、C+以上が「良(good)」というカテゴリー)。C+があれば、私費学生として授業料を全額支払えば国立大学に入学できる可能性がある。彼の成績表は画像として電子化されており、求職の際、雇用者に送るといふ。

苦学して中等学校まで祖母の支援を得ながら卒業している(両親が離婚、あるいは親と死別することは、良く聞くことである)。週末や休暇中は、勉強どころではなく、学費を稼ぐために働いている。この祖母と彼の自宅も、バスで数時間の距離にあり、同じコミュニティの中で生活しているわけではない。外部者が期待するコミュニティ内における相互扶助は現実には起こりえない。中等学校を卒業しただけでは雇用市場での

付加価値はなく、なんとかカレッジに進学することを目指していたが、経済的な理由で実現は難しい。KCSEの結果は、同級生の中では悪くないが、事務職に就ける可能性はほとんどない。

2012年になり、2年数か月の求職期間を経て、このエレメンテータ湖にあるキャンプ地で定職を得たとのことである。それからすると、卒業後すぐに就職できなくとも、中等学校卒業の学歴があればこそ、雇用の機会を得ることができたのだろう。また、長男であったからこそ、祖母の支援を得て、中等学校まで卒業できたことも事実であり、貧困家庭ほど、生活の戦略として、このような点で男女の区別をするのかもしれない。

(2) ジョイク (1984年生れ、26歳、女) :

2010年9月面談

小学校7学年(17歳、2001年)で妊娠のため中途退学した。割礼を1996年に受け、伝統社会では結婚可能な女性として見なされることになる。妊娠の相手は隣接する中等学校の生徒であったということであるが、それから数年後に別のマサイの青年(6歳年上、同じ小学校を卒業)と結婚し、伝統社会に戻り生活している。子どもは第1子(9歳、女)、第2子(3歳、女)、第3子(1歳、男)の3人がいる。35頭のヤギを飼育し、畑(30エーカー)ではメイズを育てている。夫はナロック市の食堂にある肉屋で働き(月収5000シリング)、単身赴任している。自宅からナロック市までは、幹線道路まで徒歩1時間、そしてさらにバスに乗り1時間を要する。

ジョイクは卒業することなく「中途退学」したわけであるが、それから10年が経過し、彼女にとって小学校時代を振り返り、学校での楽しかった記憶を尋ねたところ、音楽やゲーム(運動)をしたことで、走るのが好きだったと答えた。好きな教科は英語とスワヒリ語である。今の生活では、英語を

話すことはほとんどないので、英語によるコミュニケーションは難しい面もあるが、十分な意思疎通はできる。中途退学した直後は、自責の念に駆られ、その落胆は大きかった(面会して話を聞けるような状態ではなかった)。

今の生活で就学経験がどのように役立っているか、あるいは役立っていないのかを話してもらった。まず、昔の級友とマーケット(徒歩1時間、週2回程度行く)で会い、子育てや畑、家畜のことを話し、相談することがある。彼女自身が就学の効果として明確に認識している点を十分に聞き取れたわけではないが、地元で育ったマサイ教師によれば、夫(男)に依存せずに自立した生活をしており、時間とリソースを考慮して、物事を計画的に動かす力があるという。また、彼女は母語ではないスワヒリ語や英語を解し、現在の環境での英語の実用性は別にして、学校へ行き英語を話せるようになったことが、彼女の生活世界を広げ、精神的な安定と自信をもたらしている。現在の生活は近代的なものではないが、伝統社会の中でも小学校で習得した知識を使い、家族の健康や衛生面に注意した生活をしている。

小学校の「中途退学」とは何なのかを考えさせられるインタビュー内容であった。彼女の看護師になるという夢は消えたが、小学校卒業生の半数近くは中等学校へ進学できないのも現実である。それからすると、卒業(8年間の就学)と中途退学(特に6~7年就学している場合)に、卒業資格を得られるか否かを除いて、それほどの大差はあるのかと思えてくる。特に、高学年になると受験対策に時間が割かれており、成績が良くない生徒にとっては教師から責められ、辛いこともある。

一定の期間、同年齢の友人と生活を共にすることは、生涯において少なくない良好

な影響があるのではないだろうか。コミュニケーションの言語として、母語以外のスワヒリ語と英語をある程度習得することは、伝統的な社会においてどれほどの実用性があるかは別にして、広い社会を知っているという自信につながる。衛生面などでの生活の改善、夫（男）に依存せずに一人で自立した生活ができる（対等な関係の構築）、物事を計画する力がつく。

就学することの意味は、新たな教科の知識を得ることだけではなく、もっと基本的な、より健康で豊かな生活を送るために必要となる能力を身につける機会になっていることに、もっと注目する必要がある。

(3) ウィペレ (1974 年生れ、37 歳、男) :
2010 年 9 月面談

父親 (1945 年生れ) には 2 人の妻がいたが、第 2 夫人 (1950 年生れ) は 1987 年に病死した。父母ともに学校教育は受けていない。第 1 夫人 (1952 年生れ) には子どもが 10 人 (男 5 人、女 5 人) おり、彼は第 5 子である。第 1 子 (1966 年生れ、女)、第 2 子 (1969 年生れ、女)、第 3 子 (1971 年生れ、男) はまったく学校教育は受けていない。その理由は、近くに学校がなかったからである。1979 年に家の近くに学校が偶然開校し、第 4 子 (1972 年生れ、男) 以降、第 7 子 (1982 年生れ、女) を除いて、中等学校に進学している。

ウィペレの兄弟姉妹は、地域でも高学歴で有名で、特に彼と直ぐ上の兄 (1972 年生れ) はナイロビ大学とケニヤッタ大学をそれぞれ卒業している。この 2 人が弟や妹の中等学校までの学費を負担した。この兄は、現在、カジアド県にある中等学校の校長である。自分たちが高等教育を受けられたのは、家の財産としての家畜の数が少なく、それを長兄 (第 3 子) が引き継いだため、家庭の中での仕事がなくなり、そこでちょうど近所に学校が開校されたという偶然が

重なっている。

第 2 夫人には、第 1 子 (1977 年生れ、男)、第 2 子 (1981 年生れ、女)、第 3 子 (1983 年生れ、男)、第 4 子 (1986 年生れ、女) の 4 人の子どもがいる。この 4 人とも中等学校まで進学しているが、2 人の女子は結婚のため 1 学年で中途退学している。2 人の男子は中等学校を卒業し、第 1 子は実家に近い中等学校の補助員、第 3 子は県事務所勤務している。

彼が小学校へ 7 歳で入学するまでの経緯であるが、マニヤッタ (マサイの伝統的家屋) の近くにアフリカ内陸教会 (Africa Inland Church) により小学校が開校され、NGO ワールドビジョンが家畜 (牛とヤギ) を提供し、農業を指導し、定住することを薦めた。保有する家畜数が少なかったがために (すなわち、マサイの人びとの中では豊かな暮らしではなかった)、比較的自由になり、教会関係者により学校へ連れて行かれた。直ぐ上の兄とは 2 歳離れているが、小学校入学 (1981 年) も卒業 (1989 年) も同時である。2 人とも 2 回留年している。モラニズム (マサイの戦士に代表される成人への通過儀礼) は経験していない。

学校での生活は、給食があり、家にいるより楽しかった。1 クラスの生徒数は 20 人ぐらいで少なかった。教師の半数はキクユ (ケニアで最大多数の民族) であった。教科書が今のように十分あったわけではなく、施設もよくなかった。ただ、マサイ語で書かれた物語の本 (story book) はあった。放牧の手伝いをしながら教科書を読んでいたという。教員宿舎に住む教師には、毎日、水をジェリ缶に入れて持って行った。毎朝、調理用に木の枝を 1 本持ちながら登校することになっていた。

遅刻した時など、体罰 (木の枝でたたく (caning)) は頻繁に行われた。数学の成績は良かった。級友との競争が勉強を支えてくれた。授業参観日 (parents' day) に成

績優秀者が表彰されることも励みになった。小学校7年卒業時の級友21人(男16、女5)は、男子1人を除いて、全員が中等学校へ進学した。これには、NGOが個別の子どもを中等学校卒業まで支援してくれたことが背景にある。

中等学校は1993年に卒業し(KCSE B+)、ナイロビ大学商学部には1995年に入学、1999年卒業している。大学の学費(授業料は年間、16,000シリング)として、11万シリング(当時のレートで2000米ドル程度)を借り入れた。2000年から2006年までナロク県の民間企業で会計を担当した後、公務員になり、主に財務関係を担当した。現在のナロク上下水道公社では2009年から代表取締役として働き始めた。給与の約半分(50万シリング)は、兄弟姉妹の子どもの学費に費やしている。ただ、マサイの世界では、家畜の世話をすることが誇りであり、自分には誇れるようなことはない、と話した。

ウィベレから見た現在の小学校(母校)は、施設は整っているにもかかわらず教師は一生懸命に働かないと映っている。親と教師のコーディネーションが悪い、親が子を勉強するように励まさない。小学校教師の社会的地位は決して低くなく、この周辺のコミュニティでそれほど給料をもらっている者はいないのだから、人びとの模範となる行動をするべきだと考えている。

小学校が自宅近くにあるのは、就学するためのかなりの動機づけになることがわかる。ただ、それだけでは不十分であり、個別の子どもに対する継続的な支援も重要である。驚くべきことは、その二者がそろえば、今では想像できないぐらいの学業成績を生徒は修め、中等学校、大学へと進学している。この当時、寮はなく、生徒は自宅に帰れば、家事を手伝わなければならない、学習時間など確保できない。

マサイの社会において、家畜が多い裕福

な家庭でなかったからこそ、小学校での学習機会を得られたという話も興味深い。また、マサイの社会では家畜の世話をすることが大切であり、現金収入はあっても、それは決して誇れることではない、と意味づけているのも、伝統と近代の価値観の間で揺れ動く心情を典型的に表しているように思える。

彼の学習へのモチベーションを何が支えていたのか、何度か話を聞く機会があったが、同級生との「競争」や参観日での「表彰」ということであった。なかなか理解しにくいところもあるが、スポーツマンシップにも近い意識なのかもしれない。

(4) ナムソン(1944年生れ、66歳、男)：
2010年9月面談

父親は学校へは行っていないが、教会で簡単な読み書きは勉強していた。4人の妻がいたが、その当時は一夫多妻が普通であった。農業と牛車を使ってメイズなどの荷物を運ぶ商売をしていた。父は学校へ行く価値を良く理解していたが、1962年に死亡した。ちょうど中等学校の1年になったばかりの時期で、当面の授業料は母がローカルビールを売って稼いだ小銭で払った。今でも学校に母親が来て、小銭を集めて支払った光景を覚えている。その母は2008年に90歳で亡くなったが、家族のなかで子どもに教育を受けさせてくれたという点で重要な存在であった。

小学校の教師は厳しかった。授業料も払っていた。試験が毎週金曜日にあった。1～2年生では、紙がないのでスレート版に文字を書いた。高学年になっても、ノートは半分に切られて渡された。教科書はあり、生徒は1クラス30人程度であった。体罰は日常的に行われ、木の枝で打たれた。成績順に座席が決められた。

中等学校は、自宅から80マイルほど離れた寮制のボーディングスクールだった。

カトリックの学校で校長はヨーロッパ人であった。父親の死亡で授業料の支払いが問題となったが、ちょうど1963年にケニアが独立し、2年の時からブングマ県から奨学金を得ることが出来た。学校では本当に勉強をすることを教えられた。級友は30人ほどいた。

この中等学校は4年までしかなかったもので、それで就職するつもりでいたが、母親に進学することを強く勧められ、ニエリにある中等学校の5年に進学した。授業料がここでも問題であったところ、ケニヤッタ大統領（当時）の政権が中等学校5年と6年の授業料を無償にし、寮費も免除され、学校に支払うのは試験料だけとなった。6年修了時に大学進学資格試験（いわゆるAレベル）に合格し、1968年にマケレレ大学（ウガンダの首都カンパラ）に選抜された。大学生としてもらう給付金で姉弟の学費を支払い、一家の生活を支えられるほどの金額を得ていた。

マケレレ大学を3年で卒業し、1971年にカイモシ初等教員養成校の講師になったところ、ナイロビ大学の修士課程に奨学金を得て進学することができ、1973年に修士号（MA in Education）を授与された。大学にそのまま助教、講師として残りながら、パートタイムで博士課程にも籍を置き、1978年に博士号（PhD）を取得した。

学校は家にいるよりはるかに楽しい場所であった。全力で勉強するかどうかは選択ではなく、教育の機会を与えられた誰もが当然のことと感じていた。卒業すれば就職もすぐ決まり、人生の展望が開け、今とは随分違う、良い時代であった。

ナムソンの教育については、母親の影響がかなり強かったようであるし、彼自身も子どもの教育に一番影響を与えたのは、母であったと説明している。それに奨学金や授業料の無償化など、偶然が重なったとい

うのも、彼の不断の努力の結果と見るべきかもしれない。

小学校の様子は学級規模が小さかったことを除き、施設や教材の面からすれば、現在の小学校より厳しい環境にあったと考えられる。授業料の負担、体罰、成績重視など、子どもにとって決してやさしい環境ではない。それは小学校を卒業するだけでも、その学歴により、就職することができた、という当時の社会環境もあるのだろう。「全力で勉強するかどうかは選択ではなく、教育の機会を与えられた誰もが当然のことと感じていた」という感覚は、選ばれた者としての義務とでもいうことかもしれない。

大学まで入学すれば、教育費用の心配をする必要が全くなく、学生としての給付金で十分以上の生活が送れたのである。高学歴失業など全く心配する必要のなかった時代であり、昨今の社会情勢とは全く違う。現在のような将来の展望が利かない時代において、学習意欲を維持するのは容易ではない。

(5) メシュコ（1969年生れ、37歳、男）：
2006年7月面談

父親には4人の妻がいたが、2005年に死亡した。彼は第2夫人の長男だが、下に弟が5人、妹が3人いる。高等教育を受けたのは彼だけで、すぐ下の弟は学校へは行っていないが、次の妹は小学校を卒業した。9人の兄弟姉妹のなかで他に小学校に通ったのは下の3人の弟だが、中等学校には進学していない。

生年は本人によれば1969年生れであるが、小学校修了時の受験データでは1972年になっている（それほど生年は判然とせず、便利に変動する）。1988年に中等学校に入学し、1992年に卒業している。1年間自宅で過ごし、カイモシ初等教員養成校に入学した。1995年に卒業し、現在の勤務校に赴任、1996年には副校長になった。ススワゾー

ンにある小学校3校に勤務し、校長を務めたこともある。2004年から近隣の学校に1年数か月勤務していたが、校長と意見が合わず、遠方の学校へ異動を命じられ断ったところ降格され、2005年から現在の学校に勤務している。

小学校時代を振り返ると、学校へは1978年に村のチーフにより無理やり連れて行かれた。教師は比較的親切だったと記憶している。ただ、体罰は頻繁にあり、木の枝でよく打たれた。音楽の時間が好きで、伝統的なドラムなどを練習した。当時は、牛乳を無料で飲ませてくれた。学費は、父親が負担した。父に特別に教育に対する理解があったわけではないが、徐々に関心を持つようになった。教科書は政府から支給されていた。教員の質は、現在も当時も同じようなものだ。違うところは、施設が今のほうがはるかにしっかり整備されていることだ。生徒の規律は当時のほうが確保されていた。生徒の数に比べると、当時の教師の数は多かった。現在は生徒の数が増え、教室は混雑し、特に無償化（2003年）以降は教育の質が低下している。

2006年5月にケニア教員組合のマオ地区（約300人の教員がいる）の代議員に立候補し、大差で当選した（強力な対抗候補者は、この地区で最古かつ最大規模の小学校の意見が合わなかった校長であった）。校長になりたいとは思わないが、政治には関心がある。この代議員の職は、校長よりも上の立場にあるという認識である（校長などの管理職も含め、教師全員が組合のメンバー）。

メシュコが小学校に入学したのは、ちょうど学校が新たに開設された時に、適切な入学年齢にあったことが理由のようである。まさに偶然である。しかし、このような学校に馴染みのない子どもであっても、しかるべき教育を提供すれば、高等教育を受けられるだけの学力をつけることができるの

は、今の多くの小学校の現状からすれば驚きである。

彼が小学生だった頃にそこで勤めた元教師にインタビューしたところでは、生徒の学習に対するモチベーションを高めるために、次のような方策を取っていたということであった。①成績優秀者にペンなどの賞品を出したり、特別なバッジをつけさせる制度を取り入れる。②進級の判断のために試験を行い、それに合格してはじめて進級できるという制度にする。③終業式や保護者会の際に、クラスの中での成績順位を発表する。生徒間で競争させることでモチベーションを高め学力の向上を図るという理論であり、(3)のウィペレのインタビュー結果とも合致している。

教員養成校卒業後、地元の小学校で教えることになる。地元に対する愛着は深く、同僚の教師からは信頼が厚いのか、組合の地区代議員に最有力であった校長を押し立てて選挙で選ばれた。教員の配置換えは、有力者とのコネの強さが重要であり、かなり恣意的に行われている。そういう中で、教師としての昇進は実現していないが、民主的な選挙で選ばれたという誇りは、彼にとっては相当な自信になっている。

(6) ナイラバ（1958年生れ、46歳、男）：
2004年7月面談

ナイラバの両親は、学校教育を受けていない。しかし、父はナイロビのヨーロッパ人の所有する畑の世話をしており、後に国立公園のロッジで働いていた。兄弟姉妹は本人を含め、7人である。彼は4人目で、一番上の姉は小学校だけを卒業、2番と3番の兄は、中等学校を卒業している。すぐ下の弟も中等学校を卒業、その下の妹は死亡、一番下の妹は小学校を卒業した。

1966年に小学校に入学している。その当時は今とは教育制度が異なり、初等教育は7年間であった。1975年から9年までナロッ

ク市の中等学校で勉強をした。授業料は毎学期 240 シリング（当時、12 英ポンド程度）払ったが、寮費や制服は無償であった。年配の男女の教員は英国から来ていた。8 か月ほど自宅で待機し、1980 年から小学校の無資格教員として働き始めた（中等学校を卒業すれば、自動的に小学校の教員にはなれた）。その後、1982 年にエレギ初等教員養成校に入学し、1984 年に卒業した。教員養成校は授業料が無償で、手当ももらえた。教員として勤務を始め、現在のイルキクアーレ小学校に赴任するまで、ナロック県の 5 ケ所の小学校で勤務した。

当時の小学校は、カリキュラム内容が多すぎたので、教えるのも大変だったが、小学校を卒業するだけで事務職に就けた。本当によく勉強した。教科書は政府から支給された。授業料も無償ではなかったので毎学期 20 シリング（当時、1 英ポンド程度）払っていた。マサイ語の教科書もあった。小学校教員は、民族で言えば、マサイ以外に、キクユ、カンバ、メルーなどであったが、マサイの教師は低学年を教えていた。同じ年代の子が集まり、学校は楽しい場所だった。教師は怖かったし、木の枝でたたかれた。今は生徒に自由がある。学校は厳しい場所でもあった。

兄弟姉妹のなかで、女だけが小学校卒業（中等学校に進学していない）であることは、当時、女は小学校まで、男は中等学校に進学できる、という暗黙の合意があったことをうかがわせる。小学校を卒業すれば事務職に採用された時代であり、決して、小学校卒業の学歴は最低限のものではなく、地域で生活するには適正な学歴だったのだろう。

ナイラバの場合、小学校卒業後、無資格教員として働いている。それほど中等学校卒業者は少数であったということでもある。当時の小学校は施設面では不十分でも、教

科書などの教材はある程度整備され、教員のモチベーションも高かったことがわかる。学校での体罰も含め、当時の小学生の生活を知っている者からすれば、今の学校の教師は、十分に優しいということになるのだろう。

(7) オグツウ（1951 年生れ、55 歳、男）：
2006 年 7 月面談

父母ともにしっかりした教育を受けていない。父親は 3 歳の時に死亡、母親は中等学校 4 年の時に死亡した。兄弟姉妹は本人を含め 7 人で、彼は下から 2 番目である。一番下の妹も初等教員養成校を卒業しているが、上の姉 3 人は小学校、3 番目の兄は中等学校だけを卒業している。

1962 年に小学校に入学し、4 年生までは地元のニャンザ州ボンド県にいたが、ナイロビで家畜衛生関係の仕事をしていた長兄を頼り、転校した。学費はこの長兄が出してくれた。1969 年にナイロビの中等学校に入学し、1972 年に卒業した。1973 年にシリバ初等教員養成校に入学し、1975 年に卒業した。

最初の勤務校は、キスムの郊外にある小規模な学校で、1979 年（26 歳）には校長になった。1989 年までキスムに近い小学校 2 ケ所で働いていたが、同年にナイロビの学校に異動を願い出て転勤した。それから、ナイロビの小学校 4 ケ所で校長や副校長として勤務し、現在に至る。1998 年にケニヤッタ大学にパートタイム学生として入学し、2003 年に卒業した。

その当時の小学校は、教員の質は今より良かったと思う。教科書も十分ではなく、無資格教員が多かったが、教員はもっとまじめに働いていた。

オグツウは偶然というより、自らの選択により教育を受ける機会を探し続けてきたと言ってよいだろう。父母ともに中等学校

在学中までに死亡し、兄を頼りにナイロビに居を移し、教員養成校を卒業、ナイロビ市内の小学校で要職を務めてきた。妻が大学の講師であり、彼が小学校の校長であっても、給与は妻の方が何倍も良いと話していた。その影響もあるのか、自己資金で大学に入学、卒業している。

1980年代の小学校は、ナイラバが話しているように、無資格教員が多かった。有資格の教員イコール質の高い教育が提供できるわけではない。教員のコミットメントが当時の方が今より高かったということであろうか。

4. おわりに

本稿により特別な研究成果を提示できたわけではない。ただし、人びとの〈教育ライフストーリー〉を通して、学校教育に関する新たな視点や課題の探索、仮説的な思考を巡らせるには、役立ったのではないかと考えている。すなわち、研究の枠組みを作り上げるプロセスとして活用すれば、人びとの生活に寄り添った、より実態に即したものに研究の枠組みを調整することが可能となり、研究の質も高まる。

研究方法は、まだまだ試行錯誤の段階である。インタビューデータの収集もかなり粗いが、今後、質問項目をもう少し整理すれば、汎用性のある調査法になるかもしれない。現段階のものは、インタビュー内容にもかなりの濃淡があり、推測も多く、実証に活用できるだけのデータでは必ずしもないが、問題点のあぶり出しにはなっていると思う。学校に対する意味付けなどにおいて、誘導的な質問がなかったかという点と自身が持たない面もある。研究者の関心を被調査者が微妙に感じ取り、語りの内容を変えている可能性もあるかもしれない。

今回の場合、インタビュー相手が男性に偏っているが、女性に焦点を当て、(2)の

ジョイクのインタビューを発展させれば、長期的な小学校就学のインパクトを実証するようなデータを蓄積することができるので、今後取り組んでいきたい研究テーマである。

参考文献

- 伊藤瑞規・澤村信英 (2011) 「ケニアの小学校における学校文化—生徒・教師間のダイナミクスに注目して—」『国際教育協力論集』14巻1号、1-14頁。
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学—ライフストーリーの聞き方—』せりか書房。
- 澤村信英 (2007) 『アフリカの教育開発と国際協力—政策研究とフィールドワークの統合—』明石書店。
- 澤村信英 (2009) 「教育開発研究における質的アプローチ—フィールドワークから現実を捉える—」澤村信英編『教育開発国際協力研究の展開—EFA (万人のための教育) 達成に向けた実践と課題—』明石書店、27-47頁。
- 澤村信英・伊元智恵子 (2009) 「ケニア農村部における小学校就学の実態と意味—生徒、教師、保護者へのインタビューを通して—」『国際教育協力論集』12巻2号、119-128頁。
- 澤村信英・山本伸二・高橋真央・内海成治 (2003) 「ケニア初等学校生徒の進級構造—留年と中途退学の実態—」『国際開発研究』12巻2号、97-110頁。
- 山田浩之 (1997) 「英米におけるライフ・ヒストリー研究の系譜—社会学、教育社会学を中心として—」『松山大学論集』9巻5号、141-161頁。